

一ノ瀬 正樹先生

大学院人文社会系研究科・基礎文化研究専攻哲学専門分野哲学研究室
グローバルCOEプログラム「死生学の展開と組織化」拠点リーダー

GCOEプログラム「死生学の展開と組織化」の活動

辻：最初に、GCOE「死生学の展開と組織化」の活動について、教えてください。

一ノ瀬：死生学は、英語名だと **Thanatology** (死学) といいます。我々はそれを使わずに、**Death and Life Studies** としました。**Death Studies** はありますが、**Life** まで入れた表記は世界的にも他にはないですね。人文系に限らず、広い分野の様々な学問が関与できるようなコンセプトでつくっています。活動内容が、本になったものがいくつかあります。生命科学との関連でいえば、シンポジウム報告論集『生命科学と死生学の共働』は、人類進化、ガン治療、自殺、分子生物学など生命科学に関する講演に、我々、死生学関係の教員がコメントを加えたものです。そのほかに、死生学そのものではなく、私の大学院での演習に関してですが、『生物学の哲学』というレビュー集を2008年に作りました。私も「生命現象における決定性と偶然性」というタイトルで論文を載せています。また、「生命をめぐる科学と倫理」というタイトルで、多分野交流演習を開いたりもしています。これらの私自身の大学院演習に関わる活動も、広い意味で「死生学」プロジェクトと関連しています。最近では、森林や地球環境の研究者などに死生学ワークショップでの講演をねがえないかな、と考えているところです。あとは薬学の先生からもお話を聞いてみたいですね。それらと我々の生き死にというのは深くかかわっていますね。人文的なものとのスパークができないかなと。その他には、動物倫理が今日ホットイシューで、全世界的に哲学倫理の研究者たちが、喧々諤々論じているところなので、それを受けて、9月4日に「ヒトと動物の関係をめぐる死生学」という死生学シンポジウムを開催します。アニマルセラピーをされているアメリカ人研究者に午前中に講演していただき、午後の第一部は人と動物の関係と題して アニマルセラピーと現代ペット問題、盲導犬の問題を論じます、第二部では、動物倫理ということで、動物実験とベジタリアニズムについて論じます。

「進化」という概念の意味を、取り上げて論じる

辻：先生ご自身の研究について教えてください

一ノ瀬：人文系と生命科学の双方が関係する話題だと、「進化理論」と「脳神経倫理」(ニ

ニューロエシックス) の二つが最近の大きな焦点で、私自身も大いに関心を抱いて研究しています。

「進化理論」は、政治的な意味合いも含みますので、私たち人文系としてはそこにも関心を寄せます。例えばキリスト教の信仰の深いアメリカ中部では、進化の話はいつも物議を醸し、大きな政治問題となります。進化理論と、「種は神が作った」というキリスト教の教義は背反するところがあるからです。

辻：そういうときの哲学の立場は？

一ノ瀬：どちらが正しいと二者択一で我々は考えません。その論争自体を問題提起として受け止めます。偶然性ってどういう意味だろう、物事が法則的に決定されているとは、どういう意味なのだろう、というように問題を拾い出していくのです。私自身、こうした問題意識のもとで、「自然選択」と「遺伝的浮動」との概念的区別の問題などを研究しています。日本では想像しにくいところがあるのですが、進化理論に反対する創造説というのは、かなり緻密な議論構成になっていて、説得力も十分にあるのです。私は、どちらかが正しいかを決めて決着させるような話題ではないと思っています。

「進化」という概念の意味を、取り上げて論じる、ということを我々はやっています。生命科学の現場の先生たちは、そんなおおまかなレベルでの議論はしないし、哲学が机上の空論といわれる懸念もある。しかし、現場で何万回実験しても概念の問題は残るでしょう。そこに、生命科学と哲学とが融合する理由があると思う。しかし他方で、進化が、生命科学の現場でどう捉えられているかという知見は、哲学にとって必要です。それなしに、観念だけ議論しても、本当に机上の空論になってしまう。私たち哲学者は、おおいに勉強する必要があります。だから、先日行われた生命科学シンポジウムなどは、とても勉強になります。

生物学と哲学との接点

一ノ瀬：私の研究の、もうひとつの大きな焦点は、脳神経倫理（ニューロエシックス）です。脳の生物学的現象が、どのように人間の倫理の問題に影響を与えるかという問題。脳内の現象ですべて人間の意志が決定されるとすると、自由意志や自由意志にともなう責任の概念を、どう理解したらよいのだろうという疑問が、基本的な問題です。

脳内の物理化学的な現象によって、意識や意志が起こることが分かりつつある。しかし、犯罪行為は、自然現象として生じる不随意的な運動ではない、自由な意志に基づく場合にのみ、責任が問われる。しかし、意志が現れるのも、脳内の自然現象だとしたら、実は自然現象である点では不随意運動と差がない。それなら責任を問えるのか？ こんな「自由と必然」「自由と決定論」というギリシャ時代以来の問題が、脳科学の新たな装いのもとで再燃しているのです。例えば、犯罪遺伝子、犯罪行為をしがちな遺伝子があるとしたら、それを持つ人が殺人をしても、罪が問えないのか。人間の自由と責任を雲散霧消してしまい

そんな大問題なのです。近年の脳科学の進展とともに、もう一度人間の道徳的な評価を論じようという機運が大いに高まっていますし、私自身、腰を入れ直して、この問題と格闘中です。

脳神経倫理のほかにも、近年、道徳心理学（モラルサイコロジー）という分野もできました。善悪の心理を心理学的見地から分析する。善悪の判断以前に何が起きているのかという事実を調べようというものです。

人間の心理を進化の理論を適応して説明する、という進化心理学という分野もありますね。困っている人を助ける場合、アフリカの飢餓に苦しむ遠くの人には助けられないけれど、目の前で倒れている人は助ける。遠くの人には助けなくても非難されない、近くの人の場合には助けないと非難される。昔、人類の生存は近傍のことだけで完結していて、遠くの人との関係は自分の生存価値にほとんど関係なかったからだ、というような、進化理論の見地を加えた分析をします。道徳的に非難される・されないことを、適応度の問題として考えていく。

生物学の哲学には、そのような分野が含まれます。最近、病、たとえば糖尿病など、になりやすい遺伝的な素因というのが見つかってきている。そうすると、道徳的な素質も、遺伝的要因がからんでいるのかもしれない。そういうところに関心をお持ちの生命科学の現場の先生方もいらっしゃると思います。ホモセクシャル、犯罪行為、芸術的才能、100mをすごく早く走る能力、そういうのも遺伝的要因が関係すると考えられる。進化と大上段ぶらなくても、そのあたりで生命科学の現場の先生方とで接点があるのかな、と最近は思っています。

生命科学の現場の方々のお話があってこそ、のことなので。イルカにも興味があります。日本の場合は、捕鯨の問題もあるし。

酒井：先日の生命科学シンポジウムでの、クジラの食文化を例に挙げて「事実と規範は異なる」という話は、とてもわかりやすかったです。

一ノ瀬：ギリシャの奴隷制度は文化である。しかし、それが正しいとは限らない。文化にはいろいろあって、おじぎのようなニュートラルな文化もあれば、道徳的に問題がある文化もあるわけです。文化＝正しいと直結するわけではないのですね。日本人がクジラを食べているのは食文化の事実ですが、事実だからそうすべきだ、というようにすぐになるわけではない。奴隷を使っているのは事実だからといって、奴隷を使うべきだとはならない、というのと同じです。ただ、文化はむずかしいですよ。「文化」という捉え方じたいに事実以外の要素も含まれる可能性もありますので。

21 世紀、生命科学と哲学は密着しつつある

一ノ瀬：21 世紀の今日、哲学の問題において、人間を「生物」として捉えることによって人間の意識や倫理や社会などを理解する、という考え方を無視できなくなってきた。哲学

の世界でも **philosophy of biology** はメジャーな領域です。認識とか倫理とかいろいろな問題があるけれど結局は「生物」としての人間がやっているという基本的な着眼点を抜きにしては、論じられないだろうという。哲学と生命科学は、今かなり密着しようとしている。1980年代からその動きが高まり、私も魅力を感じて、**philosophy of biology** と題して大学院の演習の主題にしています。その時に、生命科学ネットワークで作られた『生命科学』の教科書も学生に紹介していますよ。『文系のための生命科学』は分かりやすく、読み物としても面白い。実際に演習で参照したのは、『理系総合のための生命科学』の方です。一番詳しいので。哲学にとって生命科学は、諸科学の中の一つというより、特別なハイライトをあびている領域です。20世紀は物理学の世紀で、物理学が模範のような学問で、哲学もそれに近づいていくというイメージだったのですが、21世紀はどうしても生命科学を無視できない。だから今後もできるだけ、生命科学の先生方と交流したいと思っています。

生命科学の側から見た哲学

一ノ瀬：逆に、現場の生命科学の先生方は、文学とか哲学にどういう印象を持たれているのかな、と聞いてみたいです（笑。ぜんぜん無関係だと思っているのじゃないかなあ（笑。

酒井：私の例ですと、自分も研究の中で、進化という言葉を用いますが、定義や概念を深く考えず見過ごしてしまっています。いままで先生のお話をうかがっていて、哲学とは、「みんなが分かっている気になっているような言葉や事柄について、深く考えて論じよう」とする学問で、自分にも関わりがあるということがわかってきました。

一ノ瀬：そのとおりです、そう言っていただけるとありがたいです。

酒井：その他にも、少し前に、日本のイルカ漁を撮影したアメリカのドキュメンタリー映画が論争を呼んだのですが、そういう問題に当たった時に、自分の考えをどうまとめたらいいのか、悩むことがありました。賛否両論聞いてふらふらしてしまったり。そこで、考えをまとめる上でのヒントのようなものを、哲学からいただけるのではないかと、思いました。

一ノ瀬：それは、日本の文化とイルカを特別視する欧米の文化のギャップで、哲学倫理の問題ですね。倫理は、火種なんです。倫理的主張をすると、必ず論争や反論を呼んで特定の人に違和感や怒りを呼び起こしてしまう。非常に危うい。でもだからといって、なんでもいいというわけではなくて、なにか考える「指針」がほしい。問題が起きた時に、どう対応してどう答えていいのか。その指針を考えるのが哲学倫理だというのは、まったくおっしゃる通りです。

酒井：私のように動物を相手にする研究者のほかにも、医療、動物実験、遺伝子解析などに関わる生命科学研究者にとって、しっかり考えておくべき問題はたくさんあると思います。だから、生命科学にとっても哲学はなくてはならない学問なのではないでしょうか。

これまでの哲学・これからの哲学

辻：今日、話をうかがって思ったのは、例えば金銭問題とか、障害問題とかは法律の枠組みに則って問題解決される、自然科学は、実験して出た結果を世界に公表して論争するという枠組みがある。どの枠組みにもはいれない結構難しい問題があって、そういうものに枠組みを与えてくれるための学問が、哲学なのかなと。

一ノ瀬：まったくおっしゃる通りです。それを我々がやれば、まったく哲学者冥利に尽きます。

辻：それならば、小学生くらいから、哲学の時間を入れたらいいのではないかと。

一ノ瀬：実は、私の所属する学会ではそういう運動をしています。「答えがすぐに出る問題ではなくて、みんなで考えよう、いろんな意見を出しましょう」ということを学ぶ。日本では高校に倫理という科目がありますが、思想史を知識として羅列するだけなので、あまり意味がない。改善して、初等・中等教育に本当の意味での哲学教育を定着したいと本気で思っているところです。

哲学は、基本的に西洋由来の学問で、日本ではまだ 150 年しか歴史がない。成熟してないのですね。国レベルでも、必要だという認識をもっていない。ただ、哲学研究者のほうにも責任にはあります。日本の哲学は、文献の紹介とその分析にほぼ終始してきた。業界内の言葉で、「おける論文、よれば議論」などと言うのですが、「カントにおける〇〇、デカルトによれば××」といった特定の哲学者についての文献的研究です。だから、現実にかかるイルカ漁の問題で、西洋人と日本人の文化のギャップに直面した時、哲学者は発言できないのですよ。他国と戦争になりそうになった時に、日本はどのような態度をとればいいのか、哲学者は意見を言えない。だから、無用な学問だと思われてもやむを得ない。実は、本来の哲学の姿はそうではない。歴史上の哲学者たちは、いつもそのときの生々しい現実に向き合って、その根底に宿る問題性を暴き出そうと格闘してきたのです。その意味で、日本の哲学の現状は変わっていかねばならないと思っています。ただ、それをやるには、哲学研究者にもタフさが必要ですよね。たくさんの批判や反論を一身に受けることになりますから。

辻：考える枠組みを与えている立場だということを周りが分かってくれないと、おまえはどっちの味方なんだ、と言われて終わってしまいそうですね。

一ノ瀬：そうですね。でも、変えてゆこうという雰囲気になりつつありますし、私自身もそう心がけています。今度本を出すのですが、動物の倫理や死刑の問題について、自分の考えをちゃんと出して、批判を受けることを覚悟で書きました。

かといって、過去の古典的な哲学者たちの文献をまったく無視するべきだとは思っていません。少なくともジュニアのレベルでは、歴史上の古典に触れる時間は必要だと思っています。それをまったく知らずにイルカ漁の問題といっても、ちゃんとした議論ができない。最初はじっくり古典を勉強して、成熟するに従って、自分の意見を出していくのが理

想だと思います。

辻：最初はレビューからあたって、必要ならば原書を参照するという感じですか？

一ノ瀬：我々は原書からいきなりやります。言語もそのままです。英語、ドイツ語、フランス語のほかに、ラテン語やギリシャ語もあります。しかも書かれた当時の古語です。

酒井：かなりハードですね。

生命科学ネットワークに期待すること

私たちは、生命科学との連携は特に強く、射程に入れていきます。生命科学の研究者の皆さんも、人文系・文化系分野の研究者と交流をしてくれたらありがたいです。そして、今日のインタビュー自体がその一端だと思っていますし、人文系の教員として生命科学シンポジウムなどに誘われるのは、本当にウェルカムで、非常にありがたいなと思っています。逆に『生命科学と死生学の共働』のような形で、生命科学の先生方に講演していただいて、我々が何かリアクションする。そういうところから交流が生まれると思います。我々のほかにも、法学の先生や経済学の先生で、生命科学とのかかわりを意識している方はたくさんいらっしゃるはずです。交流への需要があると確信しています。学問なので、全面的にバラバラ、ということはないと思います。何か共通項があるはずなので、そこをうまくやっていくというのが、部局横断的な試みの眼目ではないでしょうか。

生命科学ネットワークは最初のモデルケースですね。他の分野もこれに習って横断的な交流ができればよいと思います。また、『生命科学』シリーズのようにスタンダードな教科書を作るのも、大学として重要な仕事ですし、教科書の英語化も、東京大学のレベルを世界に示すためにはいいですね。

辻、酒井：本日はありがとうございました。

一ノ瀬：実のある話ができただろうか。ありがとうございました。



写真) カントやヘーゲルの原典をバックに